# 平成三年歌会始御製御歌及び詠進歌

## 森

御　製

いにしへの人も守り来し日の本の森の栄えを共に願はむ

皇后陛下御歌

いつの日か森とはなりて陵（みささぎ）を守らむ木木かこの武蔵野に

皇太子殿下

五箇山をおとづれし日の夕餉時森に響かふこきりこの唄

文仁親王殿下

二十年余の月日過ごせし我が庭に曙杉の森広がれる

文仁親王妃紀子殿下

昼たけて野鳥の森に鳴き交はす小鳥らの声我も歌はむ

清子内親王殿下

角笛（つのぶえ）は森の木霊（こだま）を誘（いざな）へり木々さやさやと湖岸（うみぎし）に鳴る

正仁親王殿下

鷲のすむ森よ永久なれと祈りつつ霧たつ福井の山をみあげぬ

正仁親王妃華子殿下

わが入（い）りこしマレーシアの森の奥ふかくオランウータンは樹々の上とぶ

宣仁親王妃喜久子殿下

百鳥（ももどり）のさへづり聞こゆ朝まだき霧のながるる森の中より

崇仁親王殿下

鳥ははやねぐらに入りし森の中キャンプファイアーあかあかと燃ゆ

崇仁親王妃百合子殿下

野象見むと待つ夜の原はしづまりて森の木の間に鹿の眼光る

寛仁（ともひと）親王妃信子殿下

鳥は皆ねぐらにつきて音もなく宮居の森にしじまのこれる

憲仁親王殿下

ロッキーの峰々の裾おほひたる苔色の森にわけ入りてゆく

憲仁親王妃久子殿下

内宮の森のしづけさにしみとほりただ大君の馬車の行く音

召人　梅原　猛

ものなべて往きては還りまためぐる森のことはり知るや知らずや

選者　渡辺弘一郎

われ若き儒学生にして親しみし聖堂の森今も茂れり

選者　千代國一

森かげに斑雪（はだれ）のこりて花糸冴ゆる一人静の白きむらだち

選者　田谷　鋭

森の木の根方をひたす暗き水西欧の絵は夢をいざなふ

選者　武川忠一

灯（ひ）を振りて招きしは誰雪（たれ）の舞ふ森の泉にまねかれて来ぬ

選者　岡野弘彦

齋宮の森ふゆ枯れてあかるきに遠世（とほよ）のごとく夕やくる空

選　歌　（詠進者生年月日順）

大分県　田坂増見

一位樫高くそびゆるわが森を遠くに見つつ春田たがやす

三重県　三輪タマオ

あめんぼが水輪かくたび太陽も森の木ぬれも湖底に揺らぐ

新潟県　堀　孝子

常（とこ）臥しのマット干さむと麻痺の児らをアカシヤの森の蔭に遊ばす

秋田県　佐々木永太郎

麻痺となり手入れならねど育て来し我が山の森春の虹たつ

新潟県　木伏ツネ

熊よけの鈴をふりみせきびきびと森の調査に子は発ちゆけり

広島県　樋口一郎

七人の小人きて食(は)め女童(めわらべ)と昼餉いただく森の陽だまり

岩手県　川村誠之進

市街化の進みて小さきこの森に日に幾たびか小鳥集まる

三重県　高瀬トシ

二か村の稲三十町歩うるほして森の泉のここに湧きつぐ

栃木県　杉山　弘

遠距離の客降したる夕焼のバックミラーは森を映せり

福島県　今野金哉

わづかづつ感度落ちくる無線機を待ちて救難の森に入りゆく

佳　作　（詠進者生年月日順）

和歌山県　中山俊吉

森を行く給水隊の兵の肩水重かりき今に夢見る

ブラジル国イパチンガ市　三原　豊

かつてわが墾(ひら)きし森の跡ならむ地平の涯に牛放つ見ゆ

福岡県　福田桂一

夜に入りて大阿蘇の噴煙(けむり)たなびけば幽かに火山灰(よな)の森に降る音

大分県　井上ヌイ

椎茸の榾(ほだ)木を浸す水運ぶ人の声して森は明けゆく

大阪府　重岡敏明

侵されず侵さぬ願ひもこむると言ふユーカラを舞へる森は静けし

神奈川県　出原孝夫

霧雨のけむる皇居の森かげに半蔵門の屋根ぬれてみゆ

三重県　酒井美枝子

仮寝するあまたの差羽しづまりし伊良湖の森に月照りわたる

山口県　吉武久美子

群れなして大蝙蝠の空を飛ぶ熱帯の森青き匂ひす

京都府　竹内千栄

衛星は森のいのちの息切れを色あかくぬり危機を告げ飛ぶ

福岡県　草葉玲子

百枚の毛布干しあげ子らを待つ森に野営の準備整ふ

埼玉県　鈴木照興

仰ぎ見る梢さみしき大杉の森に音して酸性雨ふる

沖縄県　徳山　潔

嶽森木洩(うたきむい)れ日淡く揺蕩(たゆた)ひて祈る耆嫗(おうな)の声の爽けき

東京都　髙橋伸幸

留学のおもひで熱く空を行くシュワルツワルトの森は続きぬ

大阪府　清水美和子

時越えて鎮守の森はしづかなり木蔭に在りて聴く風の音